

グローバル化時代の今、文化多様性の価値を問う



人	類	学
研	究	所
通	信	第19号

2018

巻頭言	2
活動報告	4
研究業績	18
刊行物	21
スタッフ	23



渡部森哉（人類学研究所・所長）

『人類学研究所通信』（以下『通信』）の発行が再開されることになった。

過去の『通信』の文章を読むと、人類学研究所が様々な変革を経て現在に至ったことがよく分かる。1992年5月に発行された創刊号の最初に「昭和54（1979）年に人類学研究所の活動が再発足することになった」と書かれている。また1992年時点では所長は不在であり、「所長事務取扱」という役割があるのみであり、当時体制は未だ確立していなかった。

1998年3月に発行された第5・6号から、所長日誌としてペトロ・クネヒト先生による記録が載っている。この所長日誌は2003年3月発行の第11号まで続く。その後、2004年3月に刊行された第12号では、所長（2003年4月-2005年3月）の森部一先生の挨拶文が、2006年3月に刊行された第13・14号では、所長（2005年4月-2007年3月）の坂井信三先生の文章が載っている。

私が南山大学に着任したのは2006年4月である。そのころ人類学研究所をどうすべきかについて喧喧諤諤の議論が行われていた。一方、大学院人類学専攻は文化人類学と考古学が一緒になった専攻であるが、それまでバラバラで、互いの交流がなかったため、2006年度から合同研究会という仕組みが始まった。また学部レベルでも、南山大学は考古学が歴史学の一部としてではなく、人類学の一部と位置づけられるアメリカ合衆国的な教育体制をとっているため、文化人類学と考古学の教員は同じ学科に所属している。こうした学科や大学院における教員間の協力体制が基盤となり、人類学研究所の活動が再開していくことになる。そして2007年4月に後藤明先生が南山大学に着任され、文化人

類学と考古学のコラボレーションは一層強固になった。

2006年からの議論では、人類学研究所の再建のためには外部から所長を呼ぶべきである、という意見もあったが、結局、学内の文化人類学系の教員が中心となり、みんなで力を合わせてやりましょう、という方向に話がまとまった。2007年4月には宗教文化研究所第一種研究所員の渡邊学先生が人類学研究所所長として着任された。そして2010年3月に刊行された第17・18号に、「今回の通信が長年続いた通信の最後となる。2010年度からは研究所報ないし紀要として新たに生まれ変わる予定である」とある。

2009年度に渡邊所長の下で、人類研60周年記念のシンポジウムが行われた。そして翌年度から人類研の活動が本格的に再開する。後藤明先生が2010年4月に所長に着任され2018年3月まで8年間所長を務められた。後藤先生の強いリーダーシップの下で、人類研は大きく生まれ変わった。以前あった研究所員による共同研究を再開することになり、最初のテーマは、文化人類学と考古学のコラボレーションを意識して「モノ・コト・時間の人類学—物質文化の動態的研究」をテーマとすることになった（『人類学研究所研究論集』第1号）。また『人類学研究所年報』が創刊され、それまで研究成果を発表する場であった『通信』の代わりとなった。そして共同研究会の活動成果は『人類学研究所研究論集』として随時刊行することになった。

人類学研究所は2010年の活動再開から、大きく2つの方向性を有している。1つ目は、狭い意味での文化人類学ではなく、広い意味での人類学的研究を志向するという方向性である。特に文化人

類学と考古学のコラボレーションを重要視している。こうしたことから物質文化研究が1つの軸となっている。2つ目は、アジアを中心としつつも他の地域の専門家を組み込む比較人類学的な視点を重視するということである。雑誌『Asian Ethnology』の編集発行が人類学研究所の活動の核の1つとなっているが、アジアに研究対象を限定してはいない。この10年間に据えられつつある礎を盤石にすべく、研究所所員の協力体制を構築しつつある。

2010年4月から2015年3月までの4年間、大学内の第二種研究所員のみで研究所の活動を維持した。2015年4月から2017年3月まで蔵本龍介さんと藤川美代子さんが、2017年4月から2019年3月まで藤川美代子さんと宮脇千絵さんが、任期付きの第一種研究所員として、研究所の主軸として尽力した。2017年4月には『Asian Ethnology』の編集者であるベンジャミン・ドーマンさんが宗教文化研究所から人類学研究所に移ることになり、また2019年4月から宮脇さんが任期なしの第一種研究所員として採用され、ドーマンさんとともに第一種研究所員2名が中心となり人類学研究所を切り盛りする体制となった。

年報や論集の刊行が軌道に乗り、年報はこれまで9号、論集は8号まで発行された。『人類学研究所年報』第1号の巻頭言に後藤先生が「そして本年報の創刊に伴い1992年から2009年度まで計18号まで刊行された『人類学研究所通信』は廃止します」と書いているが、その後の状況の変化に伴い、復活させることになった。研究所の活動全体を一目で確認できる印刷物が必要である。Webページを見れば各イベントの情報を確認できるのであるが、やはり一目で動向が分かる『通信』は便利であるし、研究論文以外の文章を載せる媒体としても『通信』が適当である。例えば人類学研究所の1つである人類学フェスティバルの記録など、文字化しなければ失われていくという指摘があった。語り継いでいくことも重要であろうが、実際、文字による記録があるからこそ、人類研の過去について、検証できる。また新しい名前の刊行物を創るよりも、できるだけ連続性を持たせるのが良いという判断から『通信』19号という位置づけとした。

人類学研究所が南山大学の中での研究のハブ的な組織として、またひいては中部地区、日本の人類学的研究の核になるという大きな目標を設定して、これから愚直に研究に取り組んでいきたい。さいわいに中部地区の人類学研究の中心である中部人類学談話会は、文化人類学、考古学、形質人類学、霊長類学などが一緒になった学際的な組織であり、人類学研究所の方向性と親和性が高い。また研究には教員間、組織間横の繋がりだけでなく、縦の関係、すなわち先代からの継承と後継者の育成ということも重要になる。大学院生には積極的に人類学研究所の活動に関わってもらおうよう働きかけている。

2019年は人類学研究所の設立70周年を迎える。60周年の際のイベントは、人類学研究所の活動再開ということで、とりあえず活動を軌道に乗せるための起爆剤となるような意味合いであった。70周年に関わる企画ではこれまでの活動を振り返りつつ、今後の方向性について色々なアイデアを汲み上げる、ポジティブなエネルギーを出していきたい。

活動報告 【2018年度】

シンポジウム

第1回公開シンポジウム 博物館活動における ソースコミュニティとの 協働の可能性と課題

- 日時** 2018.7.14 13:30～16:50
会場 南山大学 Q 棟 Q103 教室
共催 科学研究費助成事業(国際共同研究加速基金(国際共同研究強化))「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究」(15KK0069)
- プログラム** 「趣旨説明」伊藤敦規(国立民族学博物館)
「国立アメリカインディアン博物館、Nation to Nation 展における協働のかたち」川浦佐知子(南山大学人類学研究所)
「天理参考館が所蔵する北米先住民資料の沿革と活用」梅谷昭範(天理大学附属天理参考館)
「リトルワールドにおけるソースコミュニティ招聘と資料修復」宮里孝生(野外民族博物館リトルワールド)
「博物館活動におけるアイヌ民族との協働」山崎幸治(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)
コメント 伊藤敦規(国立民族学博物館)

国内外の博物館において、資料の出所となるソースコミュニティとの連携がどのように図られているのかについての発表、討論が行われた。日本と米国の五つの民族学博物館をとりあげ、さまざまな博物館活動(収集(映像収集含む)、整理・分類、保存・管理、修復、研究、展示、映像資料の上映やデータベース構築といったアウトリーチ活動など)に注目しながら、研究者とソースコミュニティとの協働の在り方の事例を共有した。結果、両者の協働の可能性として、例えば、物質的には延命措置が施され続けるものの文化的な生命力が減退する民族誌資料の

蘇生が可能であること、これまでに注目されることなかった民族誌資料や伝統知への配慮を可視化することで多文化共生や異文化理解を深めることが可能なことなどが明らかになった。課題としては、両者の協働は短期的ではなく長期的かつ継続性のある交流事業として制度設計されることがより望ましいこと、そのための予算措置が必要なこと、博物館職員間での理解の促進や事業継承の円滑さなども不可欠なことが明らかになった。



総合討論を司会する伊藤 敦規氏

第2回 公開シンポジウム 日本と韓国の 人類学ネットワーク

- 日時** 2018.11.18 13:30～17:30
会場 南山大学 R 棟 R65 教室
共催 南山大学人類学研究所
「1980年代以降の韓国における文化人類学的日本研究の形成と展開」林慶澤(全北大学校日本学科・教授)
- プログラム** 「1970年代以降の日本の人類学における韓国社会研究」本田洋(東京大学・教授)
コメント1 宮沢千尋(南山大学人文学部人類文化学科・教授)
コメント2 Benjamin Dorman(南山大学人類学研究所・第一種研究所所員)
登壇者 渡部森哉(南山大学人類学研究所)

日本（東京大学）で博士号を取得された林慶澤氏と、韓国で長年フィールドワークを実施されている本田洋氏が、それぞれの立場から互いの国で展開される人類学的研究の特徴と日韓の人類学者のネットワーク構築に関してご講演くださった。林氏は、研究者が自己・自国アイデンティティの模索に邁進した時期を経て、韓国で1980年代以降に増え始めた日本を対象とした人類学の研究について、博士の学位を取得された研究者の年代記を示しながら、日本留学型、西欧留学型、プロジェクト型（交流型）、国内型といったカテゴリーに分け、世代ごとの違いや特徴について分析された。本田氏は、1970年代以降、日本人および日本育ちの研究者が韓国社会を対象に行ってきた人類学的研究について、農村社会研究が主流だった時代から歴史人類学・歴史民族誌への移行、そして研究テーマの多様な広がりをみせる現在の民族誌的研究までを解説された。

これらの発表に対し、コメンテーターの宮沢千尋氏は、自身のフィールドであるベトナム研究と韓国研究とのつながりに触れながら論点を整理された。ドーマン氏は、南山大学人類学研究所編集の『Asian Ethnology』上に掲載されたことのある韓国研究および日本研究に関する論文について解説された。フロアとの質疑応答では、人類学の近接分野である民俗学の分野で日本と韓国の交流はいかに展開されているのかといった質問や、法学者の立場から韓国の家族法について調べた際に人類学の韓国研究を大いに参照したとのコメントが出された。日本（東京大学）で博士号を取得された林慶澤氏と、韓国で長年フィールドワークを実施されている本田洋氏が、それぞれの立場から互いの国で展開される人類学的研究の特徴と日韓の人類学者のネット



総合討論

ワーク構築に関してご講演くださった。林氏は、研究者が自己・自国アイデンティティの模索に邁進した時期を経て、韓国で1980年代以降に増え始めた日本を対象とした人類学の研究について、博士の学位を取得された研究者の年代記を示しながら、日本留学型、西欧留学型、プロジェクト型（交流型）、国内型といったカテゴリーに分け、世代ごとの違いや特徴について分析された。本田氏は、1970年代以降、日本人および日本育ちの研究者が韓国社会を対象に行ってきた人類学的研究について、農村社会研究が主流だった時代から歴史人類学・歴史民族誌への移行、そして研究テーマの多様な広がりをみせる現在の民族誌的研究までを解説された。

これらの発表に対し、コメンテーターの宮沢千尋氏は、自身のフィールドであるベトナム研究と韓国研究とのつながりに触れながら論点を整理された。ドーマン氏は、南山大学人類学研究所編集の『Asian Ethnology』上に掲載されたことのある韓国研究および日本研究に関する論文について解説された。フロアとの質疑応答では、人類学の近接分野である民俗学の分野で日本と韓国の交流はいかに展開されているのかといった質問や、法学者の立場から韓国の家族法について調べた際に人類学の韓国研究を大いに参照したとのコメントが出された。

第3回公開シンポジウム

自然災害と共に生きるための 知恵 —復興と生業の変化— (国際化推進事業)

- | | |
|-------|--|
| 日時 | 2018.12.23
13:00 ~ 18:00 (開場 12:30) |
| 会場 | 南山大学 Q 棟・Q103 教室 |
| プログラム | 発表 |
| | 13:00 挨拶 渡部森哉(南山大学人類学研究所) |
| | 13:05 趣旨説明 高村美也子(南山大学人類学研究所) |
| | 13:25 「輪中の洪水対策の歴史と現在」 下本英津子(日本福祉大学) |
| | 14:05 「2015年ネパール大地震をきっかけとした新たな『観光』の街づくり—ネパールパタンのP地区を事例として」 竹内愛(日本学術振興会特別研究員) |

／南山大学)

14:55 「津波常習地における災害と生業の再編・地域変容」 葉山茂(国立歴史民俗博物館)

15:35 「過熱するナマコ漁ー 2004年インド洋津波を契機とした潜水空間の拡張と収縮」
鈴木佑記(国士舘大学)

コメント

16:25 川島秀一(東北大学災害科学国際研究所)

16:55 後藤明(南山大学人類学研究所)

17:25 総合討論

4人の発表者から、各地域における災害に対する復興対策及び生業の変化について話していただきました。特に、科学技術知の必要性・重要性もしくは不必要性、コミュニティの存在、津波被害から発見された資料、行政の取り組みによる環境変化に伴う生業の変更への地元住民の考え方について議論が交わされました。災害には、種類によって質と量が異なり、個々の事例に即して議論する必要がある点が共有されました。人類学の貢献については、空中の議論ではなく地に足をつけた長期にわたる調査による人類学的アプローチが災害の復興には必要であり、それは、震災が起こるから生活が変化するのではなく、その以前から変化していることから、長い期間で生活の変化をとらえる必要があると意見が交わされました。



コメントーターを含めた総合討論

第4回公開シンポジウム

遺跡に見る在来知ーモニュメント、自然環境、インターアクション (公募シンポジウム採択企画)

日時 2018.12.26 13:00 ~ 17:30

会場 南山大学5棟 S46教室

プログラム 「なぜ古代人はピラミッドを造ったのか：メキシコ中央高原における都市の盛衰」 嘉幡茂(ラス・アメリカス・プエブラ大学・准教授/京都外国語大学・客員研究員)、フリエタ・M. =ロペス・J. (京都外国語大学・客員研究員/メキシコ国立自治大学・博士後期課程在籍)

「神殿間のネットワークと在地性：アンデス形成期の事例」 松本雄一(山形大学・准教授)

「噴火災害をどう乗り越えたか：古代マヤ人の火山とともに生きる知恵・記憶」 市川彰(名古屋大学高等研究院/人文学研究科・特任助教)
「中央と在地社会：古代アンデス諸国家の事例」 渡部森哉(南山大学人類学研究所/人文学部・教授)

コメント1 後藤明(南山大学人類学研究所/人文学部・教授)

コメント2 中尾央(南山大学人類学研究所/人文学部・准教授)

司会

渡部森哉(南山大学人類学研究所)

2018年度に人類学研究所では「"在来知"のゆくえ」をテーマにシンポジウムを公募した。審査の結果、メキシコの大学で教員をしている嘉幡茂氏を代表とする「遺跡に見る在来知」が採択された。嘉幡氏が日本に一時帰国する日程に合わせて、12月26日に開催された。

「在来知の生成・継承・革新・消滅・再起・利用」などを遺跡のデータからどのように再構成できるかが公募シンポジウムの要項に記載されているが、今回のシンポジウムでは考古学的に長期的視点から、ローカルな特徴がどのように認められるかを4名の発表者が考察した。

嘉幡・ロペス報告は、メキシコ高原地帯の3つのモニュメントを事例として、それらの建設、衰退の要因を考察した。松本報告はアンデス形成期の代表的遺跡であるチャビン・デ・ワンタルとの関係で周辺とされる地域の神殿の関係について分析し、ローカルな現象の重層的な特徴を論じた。市川報告はエルサルバドルを事例として、火山噴火という出来事を契機とした在地社会の変容、あるいは継続性について論じた。最後に渡部報告は、古代アンデスの国家社会であるインカとワリを事例として、ローカルとされる現象がいくつかの種類化できることを論じた。コメントーターである後藤明氏は文化人類学・オセアニア研究の視点から、中尾央氏は科学哲学・科学論の立場から、各報告についてコメントした。



多くの人にお集まりいただきました

講演会

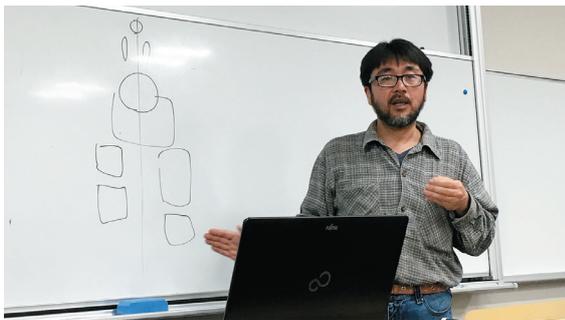
第1回公開講演会 メキシコ・オルメカ文化の モニュメント

日時	2018.5.7 17:00～18:30
会場	S46 教室
講師	古手川博一(ホンジュラス国立自治大学・客員講師)
司会者	渡部森哉(南山大学人類学研究所)

現地のメキシコに長年滞在し研究を続けている古手川博一氏に、オルメカ研究の最前線についてお話しいただきました。巨石人頭像をはじめとする様々な石彫について説明し、オルメカ文化のモニュメントの特徴について解説してくれました。

古手川氏はエステロ・ラボン遺跡の発掘調査を指揮していますが、治安の悪化のため現在は発掘を休止中だそうです。調査の内容についてはfacebookを参照してください。

講演には22名が参加し、講演後、質疑応答が活発に行われました。



古手川博一氏

第2回公開講演会 日本と台湾の絆 ～台湾"日本語世代"の ライフヒストリー～

日時	2018.5.23 11:05～12:35
会場	B31 教室
講師	東俊賢
司会者	藤川美代子(南山大学人類学研究所)

1930年、台南郊外の山奥の村で生まれた東俊賢氏。台湾の歴史を交えながら、分かちがたく結びついたご自身と日本との関係について語っていただきました。

日本人の警官から「子どもに日本名をつけたら豚肉を食べさせてあげる」と言われたという父親の話や、実家を離れて通った台南の公学校で「国語」の勉強や飛行機の模型造りをした話などは、台湾における皇民化とは具体的にどのようなものだったのかを、歴史資料とは異なる観点から明らかにしてくれるものでした。1944年、家族の反対をよそに自ら志願して少年工として日本本土へと渡航することを決めた東氏は、海軍航空技術廠で溶接を学び、台湾少年工の中でただ一人、特攻兵器桜花の製造に携わります。日本の勝利を信じてやまなかった東氏にとって、1945年の玉音放送はまさに青天の霹靂だったといえます。

東氏がやっとの思いで台湾へ帰ると、そこにかつての景色はありませんでした。日本に代わり台湾を統治することになった中華民国は、台湾の人々に北京語を基礎とした「国語」を話すよう迫り、社会の中核は大陸からやってきた外省人によって占められたほか、白色テロでたくさんの台湾人が命を落とすことになったからです。そんななか、東氏は師範学校を卒業して小学校の教員となり、最終的には台湾と日本を股にかける技術者兼経営者となっていきます。

生き生きとした日本語で語られる東氏の個人史



熱弁をふるう東俊賢氏

は、参加者に多くのことを考えさせてくれるものとなりました。講演には約 210 名が参加し、講演後には東氏と個人的にお話をしたい人で長い列ができました。

第 3 回公開講演会 東アフリカ地域における 難民・移住者

日時	2018 年 7 月 10 日(火)、15:15 ~ 16:15
会場	S21 教室
共催	カリタスジャパン
講師	Msgr. Dr. Francis Ndamira (PhD in Sociology and Development (New York University), Executive Secretary of Caritas Uganda)
司会者	ムンシ ロジェ ヴァンジラ (南山大学国際教養学部/人類学研究所)
通訳	高村美也子(南山大学人類学研究所)

近隣諸国からの難民を積極的に受け入れてきたウガンダを事例に、「ただ見るのではなく、よく見つけてください。ただ聞くのではなく、相手の言うことに耳を傾けてください。ただ顔を合わせて通り過ぎるのではなく、立ち止まってください。大切なのは、なんと気の毒で貧しい人々なのだろうとつぶやくことではなく、憐みの心に衝き動かされて行動することなのです」という理念に基づく支援のあり方についてお話いただきました。



Msgr. Dr. Francis Ndamira

第 4 回公開講演会 フィールドワークから研究へ —1980 年代以降、 中国での人類学の経験

日時	2018.10.19 17:15 ~ 18:45
会場	Q102 教室
講師	横山廣子(国立民族学博物館・名誉教授)
司会者	宮脇千絵(南山大学人類学研究所)

日本人人類学者として最初期の 1980 年代に中国雲南省に長期フィールドワークへ入られた横山廣子氏に、1980 年代の中国社会の状況やフィールドワークを通じて拾った研究の種をどう育てて研究をしてきたのか、また中国少数民族研究の視角についてご講演いただきました。



講師の横山廣子先生

第 5 回公開講演会 四国遍路 : Perpetual Pilgrims of the Shikoku Henro: Examples and Implications of Spiritual Lives on an Unending Road

日時	2018.11.16 17:00 ~ 18:30
会場	人類学研究所 1 階会議室
講師	John A. Shultz 氏 (関西外国語大学外国語学部准教授)
司会者	ドーマン ベンジャミン (南山大学人類学研究所)

John Shultz of Kansai Gaidai University presented on the topic of "Perpetual Pilgrims of the Shikoku Henro: Examples and Implications of Spiritual Lives Spent on an Unending Road." Shultz presented some historical and recent ethnographic data dealing with a number of "perpetual pilgrims"

of the Shikoku henro (pilgrimage) and discussed the reasons for their desire to keep returning to do the pilgrimage.



John A. Shultz 氏

第 6 回公開講演会

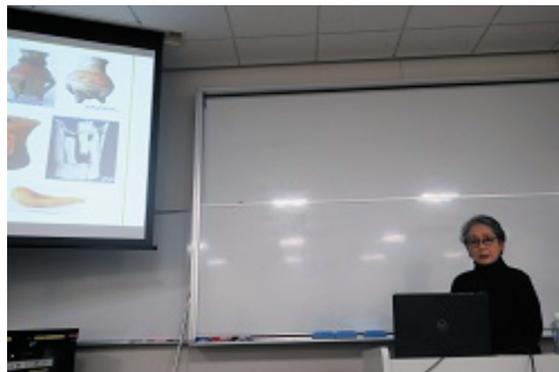
メキシコ、トルーカ盆地における 人と水の考古学

日時	2018.11.23 17:00 ~ 18:30
会場	S74 教室
共催	人文学部人類文化学科
講師	杉浦洋子 (El Colegio Mexiquense・特別研究員)
司会者	渡部森哉(南山大学人類学研究所)

長らくメキシコを拠点として考古学調査を行ってきた杉浦洋子先生に、これまでの研究について語っていただいた。メキシコ中央高原のメキシコ盆地の西部に位置するトルーカ盆地で、人々がどのような生活を送っていたのか、そしてテオティワカンなどの大都市とどのような関係があったのかなど、長いタイムスパンでお話しになった。

これまで大規模建築や墓など目立つ遺跡ではなく、当時の人々に寄り添い、人々がどのように生活していたのかに着目して研究されてきた先生の講演は、当時の人々の息づかいを再現するような内容であった。水をどのように利用したのか、何を食べていたのか、そこに住んでいた人々の遺伝子は現在の人々とどのような関係にあるのかなど、聴衆の興味を

惹きつけるトピックが取り上げられた。



杉浦洋子氏

第 7 回公開講演会

De negro de humo y punzones rituales: Atavíos y atributos de los sacerdotes aztecas

日時	2018.11.25 15:00 ~ 17:00
会場	人類学研究所 1 階会議室
講師	Sylvie Peperstraete (Université Libre de Bruxelles・教授)
コメンテーター	井上幸孝(専修大学・教授) 岩崎賢(南山大学・講師)
司会者	渡部森哉(南山大学人類学研究所)

メソアメリカの宗教とアートを専門とするシルヴィ・ペパストラート先生にアステカ王国の神官についてお話しいただいた。アステカの神官の肌は黒く、煙の儀礼を行っていた。先生は神官の服装や持ち物について、図像を注意深く観察し、植民地時代の文書でどのように呼ばれていたのか、詳しく分析、解説された。また、神官と神々、夜、大地、血との関係などについても考察された。

今回、日本の研究者との共同研究を企画する目的でベルギーから4名の研究者が来日された。ペパストラート先生はその1人である。日本の状況を分かっていたくために、コメンテーターの井上氏には日本におけるメソアメリカ研究についても紹介していただいた。



Sylvie Peperstraete 氏

第 8 回公開講演会

Folklore and Nationalism in India and Serbia: A Comparative Exploration

日時	2018.12.17 17:00 ~ 18:30
会場	人類学研究所 1 階会議室
講師	Frank J. Korom 氏 (ボストン大学教授、人類学研究所非常勤研究員)
司会者	ドーマン ベンジャミン(南山大学人類学研究所)

Professor Frank J. Korom of Boston University gave a lecture on the topic of “Folklore and Nationalism in India and Serbia: A Comparative Exploration.” He questioned whether the current age in which we are living is so different from the age of colonialism in which nationalist ideologies were being formulated in Europe, arguing that calls for walls and fences are resurfacing in both Europe and North America as a result of deterritorialization. He presented the seemingly different cases of India and Serbia, arguing that good comparisons are based on significant differences, not just similarities.



Frank J. Korom 氏

第 9 回公開講演会

Kirishitan Shrine Festival and Christian Ecumenical Discourse

日時	2019.1.21 15:15 ~ 16:45
会場	南山大学人類学研究所 1 階会議室
講師	Julian Vasquez (ストックホルム大学)
司会・解説	Roger Vanzila Mumsi (南山大学国際教養学部/人類学研究所)
使用言語	英語

The Nanzan Anthropological Institute (NAI) Workshop, held on 21 January 2019, brought together 15 researchers from six countries: America, Australia, Congo DRC, Germany, Japan, and Sweden. The workshop was structured around a one hour facilitated presentation and comments to allow all participants to enter into practical discussion. There was input from a key speaker, Associate Prof. Julian Vasquez from Stockholm University, who provided insights into the Kirishitan Shrine Festivals and Christian Ecumenical Discourse from the performance and ethnographic perspectives. During the presentation, Associate Prof. Roger Vanzila MUNSI frequently intervened for clarification and crucial comments.

Although some seemingly incidental references were made to Kirishitan Shrine Festivals in Nagasaki settings, Prof. Vasquez's presentation focused more specifically on Karematsu Shrine Festival (held annually on 3rd November) to highlight its basic aims and its historical evolution from 2000 until the crisis it experienced in 2017. The synthesis showed that the crisis was due to the local Catholic priest's stance and wrong or simplistic interpretation of the Code of Canon law (precisely canons 932,1#; 387; 838,4#; 392)

guiding the Roman Catholic Church.

From the standpoint of performative theory, it was consequently clear that the indexicality of the festival as observed until 2016 is no longer working. The continuity of this valuable festival therefore requires first of all a new negotiation between parties. This, according to Prof. Vasquez, implies the particularly intriguing question of how its script and involved indexicality should be understood and conceptualized. Secondly, the issue of power over decision-making within the respective faith-based communities should be seriously taken into consideration.

As in so many religious festivals, Prof. Vasquez pointed out that the concept of indexicality is an important way of understanding how the social energy of faith-based communities can circulate positively. This is partly because it does not seek to ignore differences. Through a sincere negotiation of the indexicality of the festival the social subjects can create a relevant script. In so doing, they can achieve a better understanding and mutual respect, and hence can live in social and religious harmony.

Ecumenism, as an interreligious dialogue, recognizes that people from different faiths and traditions can work together towards greater unity and at the same time preserve their own traditional faith and practice. Here Prof. Vasquez's contention was plain: By being involved in ecumenism, therefore, Karematu Shrine festival participants will be able to celebrate their diversity while re-embracing their historical bonds in a decided urban setting.

The discussion session helped participants to further the current issue of the Karematu

Shrine Festival and its relationship to the religiosity of the local community. Participants also had the opportunity to share their field experiences and to learn from one another as they discussed good models and paths that could enhance the Karematu Shrine Festival against the backdrop of the current Christian Ecumenical Discourse.

The workshop was a key activity of the NAI as part of its 2018-2019 collaborative research on the two main themes of "Home" and "Social organization". Feedback from the workshop was very positive. Participants saw great value in combining a performance theory and ethnography in the study of the Kirishitan Shrine Festivals and Christian Ecumenical Discourse. The outcomes of this micro-analysis sounds exciting and interesting. The next workshop on the same topic will be held in Sweden in 2020. Meanwhile both Professors Julian Vasquez and Roger Vanzila Mushi will publish a journal article on the facet of this intriguing subject to get some feedback from other researchers. Towards this end, Professors Julian Vasquez and Roger Vanzila Mushi are developing a new collaborative research project and publication on Kirishitan Shrine Festivals and Christian Ecumenical Discourse. A Performance and Ethnographic Study, which will take the form of an interdisciplinary, peer reviewed, edited book to be published in 2021.



Vasquez 氏（左）と司会の Vanzila 氏

映画上映会

第1回映画上映会

私の父もそこにいた ～証言によるベトナム残留

日時	2018.12.9 14:00～17:15
会場	南山大学ロゴスセンター1階ホール
プログラム	
14:00～14:10	あいさつ、趣旨説明 宮沢千尋(南山大学人文学部教授)
14:10～14:55	「私の父もそこにいた」上映
14:55～15:15	休憩
15:15～15:45	添野江実子氏による解説(映画「私の父もそこにいた」の企画・出演)
15:45～16:45	井川一久氏による解説(元朝日新聞ハノイ・サイゴン・プノンペン支局長、元大阪経済法科大学客員教授)
16:45～17:15	質疑応答
司会者	宮沢千尋

1945年8月15日の敗戦をベトナムで迎えた日本軍兵士のうち、約600人がその後のベトナムに留まり、ホー・チ・ミン（ベトナム共和国初代国家主席）が率いる独立戦争に参加してフランス軍と戦ったことは、従来、日本ではほとんど知られていなかった。生き残って帰国した兵士たちが、そのことについて家族にもほとんど語らなかつたことによる。

茨城県に住む添野江実子氏も、そのような元残留日本兵の1人の娘である。父の死後、自分の娘がベトナム旅行に行く際に「おじいちゃんがベトナムに行きたがっていたけど、連れて行ってあげられなかったから、せめて写真を持っていく」という言葉で、「父はベトナムで何をしていたのだろう?」と初めて父のベトナムでの事績に疑問をいただいたことから、このドキュメンタリーは始まる。

添野氏は、元残留日本兵、元残留日本兵が日本に帰国した際に連れてきたベトナム人の妻との間に生まれた子供、元残留日本兵が帰国後に結婚した日本人の未亡人、このテーマについて長年に渡り取材や研究を続けてきた元ベトナム駐在の新聞記者らに、ベトナム残留日本兵のこと、父のベトナムでの行動や居場所を尋ね歩く。そして、遂にはベトナム

まで赴き、元残留日本兵のベトナム在住の家族を訪ねるのだった。

映画の上映後、添野氏からは、父・綱河忠三郎氏のベトナムでの行動の詳細は結局まだわからないこと、厚生労働省の記録では「脱走兵」扱いであること、また、個人情報保護の壁に阻まれて情報を完全には取得できないことなどのお話があった。また、ベトナムテレビでも独自に添野氏のドキュメンタリーを制作して、ベトナムで放送したそうである。

井川一久氏からは、ベトナム文化と日本文化の類似性なども踏まえながらのお話があった。ベトナム独立戦争における日本人の役割をあまりに過大視するのも問題ではあるが、少なくとも1945～1946年段階で、生まれたばかりのベトナム民主共和国が確固たる統治権力を確立できていない状況下でフランスの再侵略に対抗するためには、日本軍兵士やその武器が不可欠であったというお話があった。さらに、生き残った元残留日本兵が語ろうとしないために取材が困難を極めたこと、残留日本兵もその妻もほとんどが死去されているなかで、後代に語り継いでいくためには、公的な援助の下での本格的な調査プロジェクトを立ち上げるべきであるとの問題提起もあった。当日は、いわゆる「ベトナム反戦世代」から、大学1、2年生まで幅広い年代の人々が集まり、関心の高さをうかがわせた。



解説：井川一久氏、添野江実子氏

第2回映画上映会 女を修理する男

日時 2018年12月16日(日)、14:00～17:30

会場 南山大学D棟DB1教室

共催 コンゴの性暴力と紛争を考える会、UNITED PEOPLE

プログラム

14:00～14:10 趣旨説明

14:10～16:05 映画『女を修理する男』(2015年制作・ティエリー・ミシェル監督・112分)

16:05～16:20 休憩

16:20～17:30 解説・討論

パネリスト

米川正子氏
(コンゴの性暴力と紛争を考える会・代表)
ムンシ ロジェ ヴァンジラ
(南山大学国際教養学部/人類学研究所・准教授)

司会者

関根健次氏(UNITED PEOPLE・代表)
石原美奈子(南山大学人文学部/人類学研究所・教授)

2018年ノーベル平和賞を受賞したコンゴ民主共和国のデニ・ムクウェゲ医師の活動を描いたドキュメンタリー映画『女を修理する男』の上映会を実施しました。この上映会は、1998年から2008年まで通算4年間コンゴ東部、西部と首都キンシャサで国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) 職員として勤務した経験のある、米川正子氏 (立教大学特定課題研究員) の申し出により実現しました。米川氏は、2016年に「コンゴの性暴力と紛争を考える会」を発足させ、同映画に日本語字幕をつけて全国各地で上映会を開催し、コンゴの紛争、およびその下で多くの女性が性暴力の被害にあっている現状について教え広める活動を展開しています。

映画上映終了後、米川氏より、①紛争下の性的テロの実態、②ルワンダ虐殺とコンゴ紛争との関係、③ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞の意義、について解説が行われました。さらに、本学国際教養学部准教授でコンゴ人神父でもあるムンシ・ロジェ・ヴァンジラ氏より、①コンゴの紛争の構図、および②コンゴ人からみたムクウェゲ医師の存在、について解説が行われました。会場には、学生が数名みられたが、多くが学外から参加された一般市民の方々であり、コンゴの医療事情、国家や女性の役割、などに関する多くの質問が上がりました。また、性

暴力が決して遠いアフリカ特有の現象でも、また紛争下という特殊な状況に限った出来事ではなく、日本国内でも起きているとする意見も出てくるなど、関心の高さがうかがわれました。



フロアとの質疑応答

人類学フェスティバル

人類学フェスティバル 2018

日時 2018年10月28日(日)、10:00～16:30
会場 南山大学ロゴセンター1階
共催 南山大学人文学部人類文化学科

●音♪で味わおう世界の文化 (企画：人類学研究所)

クラシック音楽の文脈では「バイオリン」、民族音楽の文脈では「フィドル」に名前を変える楽器が登場した歴史。伝統的な儀礼の場で霊媒師の身体に祖先の霊を憑依させるために演奏されるジンバブエのンビラ。そして、シロアリに食われて空洞になった幹をもつユーカリから作られ、その音色からヒーリングにも用いられるアボリジニのディジュリドゥ。さらに、ダンサーの動きに合わせてリズムを変化させるために高い技術と即興性が求められるセネガルの太鼓、サバル。中部地区で活発な演奏活動をしている皆さんに、民族楽器にまつわる豊かな知識の解説つきで、癒しと迫力あふれる演奏を披露してもらいました。楽器の試演や踊り体験など、参加者を巻き込んだパフォーマンスに会場も盛り上がりました。



サバル (チーム☆ワウワウ)

●エチオピアの歴史をつくった女性たち (企画：人文学部・人類文化学科石原ゼミ)

会場に所狭しと並べられたのは、美しい女性たちを織り上げたタペストリーの数々。パネルでは、エ

チオピアが歩んできた歴史が細かく説明されており、それをクイズ形式で学ぶことができました。



クイズでエチオピアの歴史を学ぶ

●エチオピア農村部 ハイブリッド式発電プロジェクト (企画：理工学部 奥村・藤井研究室 志村・黒木& 国際教養学部 吉田(早) 共同プロジェクト)

南山大学の教員と学生が共同で進めるエチオピア農村部での発電プロジェクトについての展示。実際に使用する発電機を目にして感じたのは、「こんなに小さな装置で電気が起こせるの!？」という驚きでした。設備の整わない村だからこそ、身近な道具と簡便な装置を駆使して、いかに安定的な電力を生み出すかを考えることが必要だと実感しました。



風力発電の実機

共催

公開講演会

Cool Japan in the Hot Middle East : The Globalization and Localization of Japanese Popular Culture

日時	2018.06.14 13:30 ~ 15:30
会場	B 21 教室
主催	外国語学部英米学科
講演者	Professor Mark Allen Peterson (Miami University, Ohio, USA)
司会者	Benjamin Dorman (Anthropological Institute, Nanzan University)

Professor Mark Peterson discussed what happens to Japanese popular culture when it enters the streams of images, ideas, commodities, persons and capital that flow across the contemporary world system. Drawing on case studies from Captain Tsubasa to Oshin to Pokémon, and their reception in various parts of the Middle East, he described the ways Japanese popular culture was localized, and incorporated into pre-existing social structures.

Anthropology of Japan in Japan (AJJ) 2018 Fall Meeting

日時	2018.12.8-9
会場	南山大学 Q 棟
主催	Anthropology of Japan in Japan

「知らないキリスト教を知るために」 第 1 回公開シンポジウム エチオピアで若者を育てる —学校教育の取り組み

日時	2019年1月11日(金)、15:15 ~ 16:45
会場	南山大学 B 棟 B31 教室
共催	南山大学国際教養学部 南山大学人文学部キリスト教学科 南山大学人類学研究所
講演者	吉田早悠里 (南山大学国際教養学部/人類学研究所)
司会者	VOLPE, Angelina (南山大学国際教養学部)
コメント	MUNSI, Roger Vanzila (南山大学国際教養学部/人類学研究所)

本シンポジウムでは、キリスト教会が人々のために取り組んでいる草の根の活動に光をあてて、キリスト教についての理解を深めることを目的としています。講演では、2004年よりエチオピアで文化人類学的調査を実施してきた吉田早悠里氏に、エチオピアの周縁部におけるカトリック教会の活動について、特に学校教育の普及において果たした役割についてご発表いただきます。また、アフリカの人々の暮らしと彼らが抱える問題についても具体的事例を通して考えます。

文明動態学研究センター キックオフ・シンポジウム

日時	2019.02.21 13:00 ~ 17:00
会場	岡山大学自然科学研究科棟 2 階大講義室
主催	岡山大学大学院社会文化科学研究科 文明動態学研究センター
共催	国立歴史民俗博物館、南山大学人類学研究所、 岡山大学 URA 執務室
プログラム	

- ・パート1: 「考古学を超えて」欧州との共同プロジェクト BBeyond ARCHAEOlogy の始動
「伝統的考古学と理化学的分析の融合に向けて」
エリアーノ・ディアナ (トリノ大学)
「発掘調査法の日欧比較の場としての鳶尾塚古

墳」ダニエレ・ペトレラ(国際考古学人類学研究所)

「学際的・国際的共同研究による古代吉備研究の可能性」清家章(岡山大学)

コメント・質疑

・パート2: 文明動態学研究センターの視座

「歴史資料のデジタル化による学際的研究プラットフォームの構築」後藤真(国立歴史民俗博物館)

「暴力・文明・哲学:学際的アプローチ」中尾央(南山大学人類学研究所)

コメント・質疑

本シンポジウムは岡山大学大学院社会文化科学研究科に新設された文明動態学研究センターのキックオフ・シンポジウムである。今後、人類学研究所とも連携を進めていくため、人類学研究所からは中尾准教授が参加し、発表と討議を行った。

シンポジウムの前半は文明動態学研究センターでの中核事業の一つとなる BE-ARCHAEO プロジェクト(代表はイタリアのトリノ大学で、欧州6研究期間・企業と岡山大学の共同プロジェクト)の概要と目指す方向性が紹介され、後半において今後の連携と展開についての発表が行われた。中尾准教授はこの後半で「Violence, civilization, and philosophy: A transdisciplinary approach」というタイトルで発表し、考古学、進化学、哲学による共同研究の成果について議論を行った。

当日の参加者人数は約110名であった。

共同研究

「定着／非定着の人類学
—『ホーム』とは何か」
(2016～2018年度)
代表：藤川美代子
(人類学研究所第一種研究所員)

「非営利組織の経営に関する
文化人類学的研究」
(2016～2018年度)
代表：藏本龍介
(東京大学東洋文化研究所准教授
／人類学研究所非常勤研究員)

第1回研究会

日時 2018.7.6

発表① 野澤暁子(ミシガン大学／名古屋大学／南山大学人類学研究所)

「神聖音楽祭の成立と展開：〈ホーム〉をめぐる音楽的プラクシスの諸相」

発表② 渡部森哉(南山大学)

「定住に関する一考察」

第2回研究会

日時 2018.10.22

発表① 菅沼文乃(南山大学人類学研究所)

「宮古島出身老年者の故郷観について」

発表② 濱田琢司(南山大学)

「移動する職人—福岡県小石原の「廻り職人」を中心に—」

第3回研究会

日時 2019.1.14

発表① ドーマン・ベンジャミン(南山大学人類学研究所)

「オートエスノグラフィーと自閉症療育—コミュニティの構築とボランティア募集活動」

発表② ポール・カポビアンコ(アイオワ大学／九州産業大学／南山大学人類学研究所)

「日本の将来：移民、小さな国際化、アイデンティティについて」

第1回研究会

日時 2018.10.22

発表① Patrick McCartney(南山大学人類学研究所／京都大学)

「Nihon no Yogasukepu: An Update on Global Yoga in Japan (日本のヨガスケープ)」

発表② ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ(南山大学)

「キリシタン神社の歴史と現状—地域社会の宗教観をめぐる—」

第2回研究会

日時 2019.1.14

発表① 宮脇千絵(南山大学人類学研究所)

「民族表象と経営—中国ミャオ族／モンの「文化伝承保護館」の取り組みから」

発表② リースラント・アンドレアス(南山大学)

「暴走族—社会的認知の変遷」

研究業績

DORMAN, Benjamin

2, 13 Jan. 2019.

論文

「Autism, Community Building, and Volunteering: A Personal Journey」藤川美代子(編)『人類学研究所研究論集(定着／非定着の人類学——「ホーム」とは何か)』7, pp.154-163, 2019年3月。

学会発表

“Community Building in Japan: Social Networks, Volunteering, and Disability”, Anthropology of Japan in Japan Annual Conference, Nanzan University, 8 Dec.2018.

“Crowdfunding and Volunteer Management”, Creating Connections Conference, Nagoya International School, 7 Apr. 2018.

研究会・シンポジウム報告

「オートエスノグラフィーと自閉症療育：コミュニティの構築とボランティア募集活動」、南山大学人類学研究所共同研究「定着／非定着の人類学——「ホーム」とは何か」、南山大学、2019年1月14日。

研究会・シンポジウムでのコメント

「Asian Ethnology: 日本と韓国に関する論文」、南山大学人類学研究所2018年度第2回公開シンポジウム『日本と韓国の人類学ネットワーク』、南山大学、2018年11月18日。

寄稿

“Looking in the Mirror: Reflections on Living with Autism”、南山大学研究所ウェブエッセイ『人類学メモランダム：ここだけの話』、2018年8月。

“Editor’s Note”, *Asian Ethnology* 77/1-2, pp.1-

藤川美代子

論文

“Continuing to Live on the Water: The Meaning of Land Residences for Boat Dwellers in Fujian, China”, *Journal of Marine and Island Cultures*, 7(2), pp.126-149, Dec.2018.

「はじめに」、藤川美代子(編)『人類学研究所研究論集(定着／非定着の人類学——「ホーム」とは何か)』7, pp.1-7, 2019年3月。

「一所に根を張ることと、複数の空間に根を広げること——定住化後も水上・陸上を動きつづける中国の船上生活者とホームをめぐる実践」、藤川美代子(編)『人類学研究所研究論集(定着／非定着の人類学——「ホーム」とは何か)』7, pp.45-67, 2019年3月。

学会発表

「福建南部の海に生きる民の生活世界から見る「台湾」：国防・尋根・親しき友」、日本台湾学会第20回学術大会、横浜市立大学金沢八景キャンパス、2018年5月26日。

“Conflicting Multiple Homes: Boat dwellers in southern Fujian, China who continuously move between water and land, and their practice regarding homes”, The 6th East Asian Island and Ocean Forum 2018, organized by The Committee of the 6th East Asian Island and Ocean, Guangdong Ocean University, 5 Dec. 2018.

研究会・シンポジウム報告

「定住本位社会で船に住まいつづけること——複数の管理システムを生きる中国福建南部の連家船漁民」、平成30年度島嶼研シンポジウム「船で生きる人びと——漁労・水上居民・移民船」、鹿児島大学郡元キャンパス、2018年10月14日。
 「水上の船で動きつづけること——定住本位型社会を生きる現代中国の水上居民」、水のシンポジウム——日本・アジアを循環する水の文化誌、東京大学駒場キャンパス、2019年3月13日。

寄稿

「巻頭言」『南山考人』47、pp.1-5、2019年3月。

宮脇千絵

論文

「民族表象と経営——中国ミャオ族／モンの「文化伝承保護館」の取り組みから」、藏本龍介（編）『人類学研究所研究論集（非営利組織の経営に関する文化人類学的研究）』6、pp.80-96、2019年3月。

学会発表

「伝統的な装いの商品化による「晴れ着」の創出——中国雲南省モンの事例から」、日本文化人類学会第52回研究大会、弘前大学、2018年6月2日。

研究会・シンポジウム報告

「民族衣装の〈あたらしいスタイル〉——中国雲南省モンのファッションとアイデンティティ」、国立民族学博物館共同研究「伝統染織品の生産と消費——文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐる」、国立民族学博物館、2018年12月9日。

「民族表象と経営——中国ミャオ族／モンの「文化伝承保護館」の取り組みから」、南山大学人類学研究所共同研究「非営利組織の経営に関する文化人類学的研究」、南山大学、2019年1月14日。

研究会・シンポジウムでのコメント

「コメント」、東アジア人類学研究会第5回研究大会、東北大学、2018年11月10日。

書評

「西澤治彦・河合洋尚（編）『フィールドワーク——中国という現場、人類学という実践』、風響社、2017年」『中国21』49、pp.211-217、2019年1月。

翻訳

周星著、「第五章 漢文化の周辺異民族への「生／熟」分類」、韓敏（編）『家族・民族・国家——東アジアの人類学的アプローチ』、風響社、pp.109-138、2019年3月。

彭雪芳著、「第八章 中国少数民族教育とカナダ先住民教育の比較」、韓敏（編）『家族・民族・国家——東アジアの人類学的アプローチ』、風響社、pp.197-229、2019年3月。

科学研究費助成事業（2018年度採択課題）

氏名	2018年度採択課題		
石原美奈子	基盤研究(B)	エチオピアにおけるイスラーム化の史的検証:アラビア文字資料の収集・分析を通して	継続
後藤明	基盤研究(B)	ミクロネシアにおけるスカイスケープ考古学の実践	継続
川浦佐知子	基盤研究(C)	現代アメリカ合衆国における国史編纂の動態の検討:米国先住民と国立公園局の歴史解釈	継続

後藤明	基盤研究(C)	人類学的知の表現空間としてのプラネタリウム:日本列島のスカイロアの多様性	継続
濱田琢司	基盤研究(C)	ファッション・デザインとの交差からみる地域文化の現代的消費と新たな地域表象	新規
吉田早悠里	挑戦的萌芽研究	自己／他者表象としての新たな民族誌の開拓:代言人／「巫女」としての実践から	継続
吉田早悠里	若手研究(A)	F.J.ビーバー資料群の救出:20世紀初頭エチオピア無文字社会の歴史解明にむけて	継続
中尾央	若手研究(B)	考古学理論・実践の歴史・哲学的考察に基づく人文学の哲学の基盤構築	継続
藤川美代子	若手研究(B)	船上生活者の教育と福祉に関する文化人類学的研究:日本・中国の都市部と村落部の比較	継続
宮脇千絵	若手研究(B)	中国雲南省国境地域におけるモン衣装の流通と消費に関する文化人類学的研究	継続

刊行物 【2018年度】

刊行物

- 人類学研究所（編） 『年報人類学研究』 第9号（2019年3月31日発行）
- 人類学研究所（編） 『Asian Ethnology』 Volume 77, Number 1&2（2019年1月15日発行）
- 藏本龍介（編） 『人類学研究所研究論集』 第6号（非営利組織の経営に関する文化人類学的研究）（2019年3月31日発行）
- 藤川美代子（編） 『人類学研究所研究論集』 第7号（定着／非定着の人類学:ホームとは何か）（2019年3月31日発行）
- Watanabe, Shinya(ed.) 『人類学研究所研究論集』 第8号（Diversidad y uniformidad en el Horizonte Medio de los Andes prehispánicos）（2019年3月31日発行）
- 後藤明（編） 『じんるいけん Booklet 2019 Vol.4 天文学と人類学の融合 それぞれの大地、それぞれの宇宙（公開シンポジウム講演録）』（2019年2月28日発行）
- 人類学研究所（編） 『じんるいけん Booklet 2019 Vol.5 東日本大震災を語り継ぐ一宮城県被災地からー（公開講演会講演録）』（2019年2月28日発行）

ウェブエッセイ「人類学メモランダム」

- 2018.04.02 [エッセイ 01:ここだけの話 No.1] 「今なお主流な対面式コミュニケーション」高村 美也子（人類学研究所研究員）
- 2018.04.02 [エッセイ 02:ここだけの話 No.2] 「お金に形は必要? 貝貨銀行の問い」小坂 恵敬（人類学研究所非常勤研究員）
- 2018.06.05 [エッセイ 03:ここだけの話 No.3] 「頭がなくなった!」渡部 森哉（人類学研究所所長／人文学部教授）
- 2018.06.05 [エッセイ 04:ここだけの話 No.4] 「「高齢者」を「高齢者」が支援する? 高齢者福祉の現場にて」菅沼 文乃（人類学研究所非常勤研究員）
- 2018.08.03 [エッセイ 05:ここだけの話 No.5] 「Looking in the Mirror: Reflections on Living with Autism」Benjamin Dorman（人類学研究所第一種研究員）
- 2018.08.03 [エッセイ 06:ここだけの話 No.6] 「Things Felt, Things Perceived: The Metaphysics of Fieldwork」Frank J. Korom（人類学研究所非常勤研究員）

- 2018.10.01 [エッセイ 07: ひよんなことから No.1] 「手紙よ、届け: エチオピア農村部の郵便事情」 吉田 早悠里 (人類学研究所第二種研究所員／国際教養学部准教授)
- 2018.10.01 [エッセイ 08: ひよんなことから No.2] 「大根役者の述懐: ジャワ影絵撮影での出来事」 野澤 暁子 (人類学研究所非常勤研究員)
- 2019.02.08 [エッセイ 09: ひよんなことから No.3] 「55 年前の「恋バナ」から明らかになった海女の想い」 齊藤 典子 (人類学研究所非常勤研究員)
- 2019.02.08 [エッセイ 10: ひよんなことから No.4] 「Tales from Yogascapes in Japan」 Patrick McCartney (人類学研究所非常勤研究員)

人類学 研究所 スタッフ

所長	渡部森哉	人文学部人類文化学科・教授
第一種研究所員	DORMAN, Benjamin 藤川美代子 宮脇千絵	外国語学部英米学科・教授 人文学部人類文化学科・准教授 人文学部日本文化学科・准教授
第二種研究所員	ANTONY, Susairaj 石原美奈子 川浦佐知子 CROKER, Robert 後藤明 中尾央 濱田琢司 MUNSI, Roger Vanzila 吉田早悠里 吉田竹也 RIESSLAND, Andreas	人文学部人類文化学科・講師 人文学部人類文化学科・教授 人文学部心理人間学科・教授 総合政策学部総合政策学科・教授 人文学部人類文化学科・教授 人文学部人類文化学科・准教授 人文学部日本文化学科・教授 国際教養学部国際教養学科・准教授 国際教養学部国際教養学科・准教授 人文学部人類文化学科・教授 外国語学部ドイツ学科・准教授
研究員	高村美也子	国際化推進事業・研究員

非常勤 研究員 [2018年度]

氏名	研究課題
杉尾 浩規	人類学におけるアタッチメント研究の現状と展望
山崎 剛	人類学を通じた社会活動の実践的研究
木田 歩	人類学を通じた社会活動の実践的研究
小坂 恵敬	無縁縁有縁のパプアニューギニア社会に対する文化翻訳
野澤 暁子	バリ・ヒンドゥー総本山ブサキ寺院における奉納音楽活動の民族誌的研究(インドネシア共和国バリ州)
菅沼 文乃	老年者の“生きがい”の人類学的研究:沖縄都市部の老年者を事例として
梅津 綾子	日本で生きるマイノリティ親子・家族の生き方・性少数者、ムスリムの観点から
辻 輝之	(1)Sharing Mothers:Sociality,Spirituality,and Sexuality of the Walking Statue (2)Flying Baba:Social Capital Development and Circular Faith-based Community in the Indo-Caribbean Migration (3)Religious Pluralism and Culture of Ethnicity:Religious Mode of Conflict Suppression in the Anglophone Caribbean
佐藤 純子	「仮面-その根源的意味の考察にむけて-」
Frank J. KOROM	The Making of a Transnational Sufi Family
Patrick McCARTNEY	日本のヨガスケープ The Economics of Imagination and Utopian Aspirations of Transglobal Yoga in Japan
Paul Joseph CAPOBIANCO	Qualitative dimensions of Japan's demographic changes
須田 征志	タンザニアにおける伝統医療従事者の知識の共有とモノを介した社会性に関する人類学研究
藏本 龍介	非営利組織の経営に関する文化人類学的研究
森田 剛光	滞日ネパール人の社会適応の動態に関する研究
斎藤 典子	伝統的互助ネットワーク(「ツキアイ」と「テツタイ」)が維持する海村社会のセーフティネット-下田市須崎地区の高齢者労働が担う社会的役割-

人	類	学
研	究	所
通	信	第19号

2018

2020年3月31日刊行

南山大学人類学研究所

Anthropological Institute, Nanzan University

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

TEL: 052-832-3111(代表)

Website: <http://rci.nanzan-u.ac.jp/jinruiken/>



人類学研究所

デザイン：株式会社サウザンドデザイン